《論　説》

Working Identity における John の語りの分析：中年期のキャリア・チェンジに伴う心の動き

室松　慶子

1．はじめに

中年期は、自分の人生の意義、方向性について無意識のうちに考える時期である。「ミッドライフ・クライシス」(Jaques 1965)、40歳が「人生の正午」(Jung 1931)、40歳から45歳が「人生半ばの過渡期」(Levinson 1978) と呼ばれる。「これまで何をしてきたのだろう。今どのあたりにいるのであろう。自分の人生は社会に対して、ほかの人たちに対して、そしてなによりも自分自身に対してどんな価値をもっているのか？」と自問するようになる (Levinson 1978)。夢を実現したとき、今まで頑張ってきたのはこのためなのかと思い、また、実現できないときには、それを認識する (Bridges 1980)。「自分の実際の欲望、価値観、才能、野心を発揮できるような生活を切望する」(Levinson 1978)。中年期には自分の方向性について考えさせられるという基本的テーマが確立され久しい。

一方、職業の方向性を変えるキャリア・チャンジについての研究は、転職が激しい欧米でさえまだ初期の段階にあり、キャリア・チェンジが実際どのように行われるかについてはほとんど知られていない (Ibarra 2003)。*Working Identity* は、ミッドキャリアにある職業人が自発的にキャリア・チェンジをはかるトランジション研究である。そのインタビュー調査対象者は、ミッドキャリアの年齢層にあり、38歳から43歳が一番多い。しかし、この年齢層が調査対

象者とされたのは、「中年の危機」に合わせたからではなく、これまでの職業で充分な経験を積み、キャリア・アンカー（Schein 1978）を確立し、その上でキャリア・チャンジというリスクに踏み切る人を対象にしたからである。また、語りの分析は、キャリア・チャンジの過程に焦点が絞られている。

語りの分析について水野（2000:5）は、分析・解釈視角の多様性について述べている。「素材をどう読むか、あるいはどう意味づけるのかは、読み手の側、分析・解釈する側の視点の関数なのだから、ある特定の素材を相手にしても、分析・解釈の仕方や視点は多様でありうる」。Ibarra（2003）は、キャリア・チェンジの過程という視点から語りを分析・解釈し、キャリア・チェンジのための9つの指針を提示した。それは、その副題に示されているように、*Unconventional Strategies for Reinventing Your Career*（あなたのキャリアを作り直すための慣例に従わない戦略）である。

これに対し、本研究は、キャリア・チャンジをはかろうとする職業人の心の動きを、John の語りを分析・解釈することにより捉えようとした。キャリアに関しても欧米化の波が押し寄せる日本だが、既に自立したキャリアが求められているイギリスの職業人の心の動きを捉えることは有用であると考えた。分析の結果、Ibarra（2003）には見られなかった中年期というテーマが語りから浮かび上がった。言語表現の中に John の心が顕在的、潜在的に表れた。本稿では、*Working Identity* の John の語りの分析を通して、これまで人生の多くの時間とエネルギーを費やして確立した職業から新しい職業へとキャリア・チャンジをはかろうとする職業人の心の動きを捉え、中年期の視点から解釈する。

2．John の行動概要

John Alexander（仮名）へのインタビューが実施された1991年のイギリスは、インターネット・バブルが頂点を迎えつつあったころだ。*Newsweek* の表紙に“They're Rich（And You Are Not）”というカバーストーリーが表れた時期である。(1)

イギリス人の投資銀行家Johnは、銀行員であることに嫌気がさしていた。40歳の誕生日を迎えた頃、自分に2年間の猶予を与えた。ロンドンの金融街シティで成功はしていたが満足していないキャリアから抜け出す方法をこの間に考えようとした。元銀行員が次の職として求めるお決まりの職、例えばファンドの設立等いくつか考えてみた。しかし、同じような職種では問題の先送りであると気づいた。銀行員の仕事内容以外が嫌なことにも気づいた。執筆業がやりたい仕事の選択肢の一つに思えた。自分に興味があるものをキャリアとするにはどうしたらよいか考え始めた。以前から付き合いのある会社の無償のコンサルタントとして活動を始めた。3、4年間、友人や家族には自分の苦境について話していた。いい仕事についているのに、危険を冒したいのかという反応だった。

44歳の時、期待はしていなかったが友人の勧めで占星術師に会いに行った。占星術師から芸術の方面へ進むよう告げられた。占いを終え、2人で話しをした。占星術師との会話を、Johnは人生で最も重要な時間だったと感じた。その後、公園を歩きながら自問し、失敗への恐れがなくなった。Johnは行動をおこした。銀行の勤務時間外や休暇の時間をかき集めては、執筆にあたった。

1年後、45歳の時、銀行を退職した。そのときには小説は完成し、出版の契約を終えていた。映画化の権利を売った。小説執筆が、異なった専門的活動のポートフォリオを構成するJohnの新しい仕事人生の核となった。第二が国際的な作曲コンクールの運営である。第三は、特定の顧客向けに設立した投資銀行でのコンサルティングで、これは当初の計画にはなかったことだ。Johnは、ポートフォリオキャリアに落ち着き、様々な分野の仕事を手がけている。

3．Johnの語りの分析

CM法（水野 2000）で素材を検討した。なぞり返しと解釈の作業から、解釈の視点がいくつか生まれてきたので、それらの視点から解釈を行った。素材

（1）　*Newsweek* 5, July 1999.

のキーとなる表現をマークすることにより、また新たな視点が生まれ、それらの視点から残る素材をチェックしていくという方法を取った。

分析視点は、大きく三つある。時間、綱引き、濃霧である。時間の視点は、更に三つに下位分類した：時間の単位、視座の逆転、時間である。一つの文に複数の要素が含まれていることもあるため、視点ごとではなく、時系列に項目に分け語りを提示し、分析・解釈を以下に示す。

3.1　40歳の誕生日の前の銀行員時代

John が語り始める最初のパラグラフには、時間の単位を使用することによる気持ちの表現と、綱引きと濃霧の比喩の萌芽が見られる。

> In fact, it took me five years. I think when you're going for a complete change, it takes longer than you guess. All I knew to begin with was that I didn't like being a banker. There is something rather empty about finance. It's glossy. It's interesting. Sometimes, there are really good moments. And clearly you're well paid. But most bankers do not feel, at the heart of it, that they're doing something worthwhile. I was becoming increasingly uncomfortable as my role shifted from being a client's trusted adviser to being a salesman pushing the deal. I hated having to admit at a party that I was an investment banker. I would go to intense lengths to try to avoid it.(2)

John は振り返り、銀行員であることに嫌気がさしていたことから始める。45歳でそれが解消されるまでに 5 年間かかったことを話している。ここで、"years" という表現を用いている。時間の単位という視点からみると、John は、銀行員時代の嫌な時代を描写するとき、"year" という長い時間単位を用いている。これは、時間がゆっくり動いていると John が感じていることを示し、楽

（2）　John の語りは、Ibarra（2003：134–138）より。下線は、筆者による。以下の英文についても同様である。

しくないことを表している。反対に、好ましいことについては、“moments”を用いている。

銀行の仕事については、“something”, “sometimes”のように、*some-*を使った表現で、つかみどころの無い、うまくはっきりと表現できない気持ちが出ている。これは、後に出る、fog（濃霧）という比喩につながっていると思われる。一方、収入面の良さに関しては、“clearly”を用いている。この点は、Johnにとってはっきりしていることであり、後に言及されるが、友人や家族も重要視している点である。

Johnの語りには、綱引き（tug of war）の比喩が見られる。Johnには、「空虚さ」（“something rather empty”）と「経済的安定」（“clearly you're well paid”）との葛藤がある。また、対外的な自分と、自分の内なる声との葛藤にある。“glossy”とは、英々辞典によると、something is glossy if it is designed to look attractive or perfect, even though it is not really this way である。(3)Johnは、心の葛藤を“glossy”という一語で表し、これは綱引きの比喩につながるものであると考えられる。

3.2　辞めることを決意する

> But the reason I wanted out, really, was much more fundamental. I just believed that if I stayed there until, say, age fifty-five, and then put my feet up for five years and then at age sixty looked back on what I'd done, I would not feel that I had made the most of my one unrepeatable life. So I decided I had to get out.

この部分は、銀行員から抜け出す決意を表したところである。“out”という語が用いられ、濃霧（fog）から抜け出して見通しのいい明るい場所へ行きたいという思いが見て取れる。濃霧の比喩である。

（3）*Longman Advanced American Dictionary*による。

また、未来を語りながら、視座の逆転が起こっている。55歳になったら、60歳になったら、という未来を思い描くだけではなく、視座の逆転を起こし、60歳から振り返ってそれまでの人生をどう思うか、と考えている。60歳になってこれまでやってきたことを振り返ったとき、一度しかない繰り返しのきかない自分の人生を最大限に活かしたとは思えないであろう、と。"I had made the most of my one unrepeatable life." が John にとって後悔しない生き方であり、"fundamental" なことである。

3.3　40歳の誕生日の頃　－　自分に2年間の猶予期間を与え、職探しを始める

40歳の誕生日を迎えた頃、John は自分に2年間の猶予期間を与え、職探しを始めることにした。しかし、3.1で見た通り、実際には5年間かかっている。John は元銀行員が次の職として求めるお決まりの職を検討してみた。しかし、同じような職種では問題の先送りであると気づき、直ぐに変わることが必要だと悟る。そこには、時間に関する表現が用いられ、問題解決を急ぐあせる気持ちが見える。

> I would just be deferring a problem, not solving it, and it would not get easier to solve. I urgently felt the need to change sooner rather than later.

3.4　何が嫌いなのか、仕事の内容そのもの以外の自分の職に対する思いに気づく

> I had figured out by then that I didn't want to be part of an organization, that I'd come to dislike everything that went with a big one – not the work per se, but the interminable meetings, the constant e-mail junk, and all the other busywork. Another thing that put me off it was the increasingly political nature of those places. … I'm not a political animal, and I didn't want to try to become

one.

元銀行員が進むであろう常識的な道を検討した結果、仕事の内容そのもの以外の、仕事に付随すること全てが嫌い（“dislike everything”）であることに気がついた。それらは、長々と続く会議、次々に来るゴミ同様のEメール、忙しく見せかける仕事で、嫌であるとリストしたもの全てに、時間にまつわる表現が使われ、嫌いな感情が強調されている。また政治色の強まっていく組織に嫌気がさし、組織の一部にはなりたくないと思う。

3.5　やりたい仕事に気づく　－　執筆業

Many years ago, on vacation, I fooled around with writing a novel, but I never intended to publish it.… Writing is something you've encouraged to perfect it in the foreign service, and I had a natural aptitude. So when I decided I would change careers, it seemed a promising possibility.

以前、休暇中に小説を書いてみたこと、書く事は前職で完璧さを求められていたこと、を思い出す。執筆に対しては、“fooled around”に楽しい気持ちがこめられている。“natural aptitude”があると自分の才能を認め、新しいキャリアとして“a promising possibility”であると感じている。自信があることがうかがえる。

3.6　自分に興味があるものをキャリアとするにはどうしたらよいか考え始める

I became an unpaid consultant and have remained so. In my darkest hours of banking, I took solace from ringing them up and just chatting about what was going on in their worlds.

銀行に勤めながら、二つの小さな会社の無償のコンサルタントを務め、彼らとのつながりを確立した。これが心の慰めとなる。後に語られる計画されなかった第三の仕事、つまりコンサルティングにつながるものであり、こういう仕事も好きであることがここで分かる。

"my darkest hours of banking" には二つの比喩がみられる：濃霧と時間の単位である。"darkest" とは光が見えない最悪の状態である。これまでの表現で最も激しいものではないか。混沌とし、先が見えない、光が見えないという点で、fog（濃霧）の比喩につながる。

この最悪の状態が "hours" という時間の単位が用いられ表現されている。"hours" が使われることにより、銀行での毎日の一刻一刻の仕事という実際の業務の進行のイメージがある。"darkest" という最も暗い形容詞が付き、その進行が時間単位であることにより、苦しさが表現されている。

3.7　占星術師に会いに行くまで、友人や家族に自分の苦境について、もう3、4年話していた

> By the time I found myself in front of this astrologer, I had already had three to four years of explaining my predicament to friends and family. It was always, "On the one hand this, on the other that," with no clear view emerging. They would tend to say, "I can see why writing might be interesting, but you've got a very good job and do you really want to jeopardize that?" All their advice had just added up to a fog.

友人や家族には、もうすでに3年から4年も相談していた。しかしはっきりとした見通しが立つどころか、濃霧が増すばかりである。

ここに至るまでの長い道のりが、"by the time", "already", "three to four years" という時間の表現に現れている。

"I found myself in front of this astrologer" とは、知らないうちに彼女の前に来

ていた、自分の意志で来たわけではない、という雰囲気をかもし出している。

44歳で占星術師に会いに行くのだが、そのいきさつについては地の文で書かれてあり、Johnの語りはない。友人に強く促され、懐疑的である心を脇にやる決心をして会いに行ったという説明がある。このことから、自分の悩みをある程度打ち明けられる友人が存在したことがわかる。しかし、自分の求めている答えはくれなかった。そして、占星術師に会いに行くには決心しなければならないほど切羽詰っていたことがうかがえる。自分で設定した2年間という猶予期間を優に超え、4年間経っていた。倍である。藁にも縋る思いであったのではないだろうか。Johnにしてみれば、友人が強く勧めたように思えたかもしれないが、友人はそれほど強く言ったわけでないかもしれない。何かを求めていたJohnが、懐疑的である占星術に行ってみようという言い訳として、友人のせいにしているのかもしれないし、軽くすすめた友人の言葉が重く響き、強く促したように感じたのかもしれない。

Johnにはもう答えが分かっていたのでは無かろうか。ただ、自分が心の中で出した結論に同意し、後押ししてくれる一言を待っていた。「やってみたら」、と誰かが言ってくれたら、それで勇気がもてたのに、なかなか同意がもらえない。Johnが伝える友人・家族の反応も、綱引き状態であり（“On the one hand this, on the other that”）、Johnにとっては、はっきりとした展望が見えない濃霧状態である（“with no clear view emerging”）。あまりに経済的に恵まれていたので、反対されると、リスクを冒すことは難しい。自分のことを何も知らない人はどう感じるか、他人である占星術師に会いに行ったのは、友人や家族がこれという答えをくれなかったからだ。第三者の意見が聞きたい、というのが本音であろう。

一方、占星術師に対しては、あまり期待していないような記述がある。それは、これまでの友人や家族との会話から、何を言われてもがっかりしないような自己防衛だったかもしれない。万が一、自分の心を読んで、背中を押してくれたら、儲けものであるという可能性を秘め、期待はしまいと自分に言い聞かせて、このセッションに臨んだのではないだろうか。

3.8　占星術師との実際の会話（1）—　占星術師の最初の言葉に驚く

占星術師の言葉は、John の語りを通して次のように伝えられている。

> I'm glad I haven't been you for the last two or three years. You have been undergoing a painful internal tug-of-war between two opposing factions. One side wants stability, economic well-being, and social status, and the other craves artistic expression, maybe as a writer or an impresario. You may wish to believe that there can be reconciliation between these two. I tell you, there cannot be.

占星術師の第一声として紹介されたこれらの言葉は、まさに、John の 4 年間を言い当てている。John の語りを通してであるので、一字一句占星術師が言ったこととは一致はしていないと思われる。占星術師が言ったことを John の口から語られているということは、語彙の選択や、言い回しなど、占星術師の語りの中に John の解釈が入っていると考えられる。あるいは逆に、占星術師のこれらの言葉が John に影響を与え、John の語りに反映したとも考えられる。

時間の単位の表現が用いられている。占星術師が、John のここ 2、3 年の辛さを表している。“years” という長い単位が苦しみの長さを表している。

次に、綱引き（tug of war）の表現が現れる。ここでは “tug of war” という表現そのものが使われている。それも “painful” で、“internal” である。その後、一方が経済的安定や社会的ステイタス、もう一方が作家や音楽会主催の芸術的表現であることが明示される。John の綱引き状態（葛藤）が見事に描かれている。そして、それには “reconciliation” は無いと断言される。

3.9　占星術師との実際の会話（2）—　二者択一の答えが出る瞬間、時間の凍結を感じる

> Then, suddenly here was this astrologer who after ninety seconds said, “This

is mortal combat. The one that will win is . . . ." She probably didn't pause at all, but it felt like one of those moments when time freezes. I had clarity after four years of fog. Before she said the next word, suddenly a voice on my shoulder was saying, "Oh please, let it be the artistic side," knowing that if she said, "By the way, it's the other one," I would have died a little. Anyway, she said, "The answer is the artistic side."

このパラグラフは全体が重要である。占星術師との会話の中で、決定的なことを言われる瞬間であり、時間が止まったと感じられる時である。John は、90秒後に占星術師が言ったとか、時間が凍結したように思えたとか、秒単位で時間を述べている。それに比べ、3.7では、"I had already had three to four years of explaining my predicament to friends and family." というように、友人や家族への相談に長い年月を費やしたが、ますます混乱するばかりだったことがある。年単位と秒単位の語りの差がある。時間が凍結したように感じたり、秒単位で考えたりするのは、占星術師の1秒が友人家族の1年に匹敵するような、それだけの重みがあるということだ。

John にとって、秒（second）、分（minute）、時間（hour）、年（year）は、同じ進度を持つと解釈できる。秒で表わされているのは、それだけ一秒一秒の価値があるということだ。この占星術師との会話だけが、秒単位で語られている。それだけ一秒一秒を噛み締めて味わっている。

更に、ここでは、時間が凍結したと感じられる瞬間（"one of those moments when time freezes"）が現れる。秒より短い瞬間（moment）という単位であり、さらに時間が止まっている。これは、この瞬間が John の中で最も重要であることを示している。

時間が止まったと感じられる証として、彼の自問も "Oh please, …" のように語られている。さらに、もし占星術師が John の期待している答えと逆を言ったならば、"I would have died a little." という状況である。

濃霧の比喩の観点からみると、この時間が止まったという瞬間に、4年間の

濃霧が晴れる（“clarity after four years of fog”）と表現されている。“clarity” と “one of the moments when time freezes”、つまり濃霧の比喩と時間の単位の比喩の二つが結びつく場面である。

この “clarity” を得た後、fog の比喩は John の語りからは出てこなくなる。また、綱引きの比喩も、出てこなくなる。占星術師から、“mortal combat” とまで表された綱引きだが、どちら側に力を入れるべきかが分かり、綱引き状態が無くなり、それにより濃霧が晴れた。このことにより、濃霧の比喩と綱引きの比喩が消えたと考えられる。

3.10　占星術師との実際の会話（3）— 45分後、占いはやめて、話を始めた

> After forty-five minutes, we stopped the astrology and just talked. I admitted my true situation, including the fact that I would like to write a book. I talked about my earlier, nonserious attempt at writing and after about three minutes, she said “Stop, I can't stand this. … What are you doing? You're trying to protect yourself from failure, and it won't work.”

時間の単位という視点からみると、このパラグラフでは、‘分’ の単位が出てくる。短い単位だが、占星術師との会話の中では、長いほうだ。占いの45分間は、何を話していたのか。おそらく重要でなかったのか、あるいはあまりに重要で、時間が速く過ぎ去ってしまったのか。その後、占いをやめて話しをする。John は、自分のことを語り始める。まるで、精神科医に相談しているかのように。そしてまた、‘after about three minutes’ という細かい分単位での John の時間の把握がある。そして、占星術師の叱責のような厳しい言葉が続く。最後には、こう言われる。“What are you doing? You're trying to protect yourself from failure, and it won't work.” しかし、一占星術師が、顧客に対してこのようなことを言うだろうか。口調は違ったかもしれない。いずれにしても、John の語りを通しての引用なので、John の解釈が入っている可能性が大である。

John が求めていたのは、自分の話を聞いてもらえるカウンセラーあるいは精神科医の役目をする人だった。家族や友人は、常識的判断で、銀行員の職を投げ打つのは馬鹿げていると言う。アドヴァイスに責任があるからこそ、常識的判断で応える。しかし、占い師は、ある意味責任が無い。自由に顧客が喜ぶ顧客の求める回答を言うことも可能である。John がそのように誘導した可能性すらある。4年間、誰も自分をわかってくれなかった。ここで、John は、自分の望む方向に占星術師の言葉を解釈したのかもしれない。

3.11 占星術師との会話を終えての感想　―　人生の最も重要な時間だった

> This session was, by far, the most significant hour of my life.

この感想の通り、John の人生にとって "the most significant hour" だった。それは、セッションを秒単位で彼が表したように、重みがあり、後押しとなった。この後、彼は次のステップへ踏み出せるのである。

3.12　公園を歩きながら、二つの問いを自分へ投げかける

> I devised two questions for myself there and then. It's so simple that it's ludicrous, but my God, it worked for me. I was forty-four. I fast-forwarded to an age at which I thought, fundamentally, it's all over. I picked seventy-five. My first question, starting from the vantage point of the seventy-five-year-old looking back at the forty-four-year-old, was, "If the forty-four-year-old identified something that he really wanted to do and it was really risky and he tried it and he failed – possibly fell on his face very publicly, with dire economic consequences – can the seventy-five-year-old cope with that?"

第1の問いは、75歳を人生の終わりと仮定し、その時点から今の年齢44歳の

自分を振り返ったとき、44歳のときの失敗に耐えられるか。ここでは、3.2における問いから更に進化して、60歳から振り返るのではなく、75歳を人生の終わりと設定し、死から逆算しての44才を考えている。

"the seventy-five-year-old" や "he" のように、自分を客観視した表現を用いている。「もし自分が75歳になって振り返ったとき、44歳の自分を振り返って…」等、主観的な言い方も出来るはずである。John は、ここで冷静にこの質問と向き合っている姿勢がある。

3.13　第1の問いへの答え　—　ベストを尽くして失敗したなら向き合える

> The answer was, "Yes, as long as the forty-four-year-old gave it his best shot."

3.2で、60歳になって自分の人生を振りかえったとき、"I had made the most of my one unrepeatable life." が John にとって後悔しない生き方であった。ここでもベストを尽くすこと（"gave it his best shot"）が自分にとって大事であることを確認している。

3.14　第2の問いを投げかける

> "OK, next question. … Let's assume the forty-four-year-old knew what he wanted to do, had identified it, but decided that the risk for social failure and economic failure was just too great and therefore never did it. How would the seventy-five-year-old feel about that?" And I thought that would be unforgivable.

視座の逆転という視点から、再び人生の終わり75歳から振り返る。第1の問いがやって失敗したとき、そしてこの第2の質問は、やらなかったとき。二つの問いによって自分への確認を取っている。"unforgivable" は、John が自分自

身に対して発する一番厳しい言葉である。もう行動するしかない、という自分の内面が噴き出て、決意を固める。

3.15　第2の答えを出した後身体的衝撃を感じ、失敗を恐れなくなる

> Next, a very weird thing happened to me: It was almost a physical sensation. At that instant, I lost fear of failure, and it has never come back. It was like losing vertigo. By the way, I am not indifferent to failure. I worried about what people would think and what would happen if I failed.

二つの投げかけに対して答えた後、John は “very weird thing” を体験する。“almost a physical sensation” であるという。“almost” とあるので、実際はそうではなかった。体が刺激を受ける感じがするほどの衝撃が、彼にはあったのであろう。

時間の視点があり、その瞬間（“instant”）、失敗を恐れない覚悟ができた。その裏返しは、今まで失敗を恐れていた自分がいた、ということだ。人々の評判を気にしている自分がいた、と認めているように。最初に現れた “It's glossy.” につながる部分である。John は対外的な自分と、自分の内なる声との葛藤（綱引き）にあった。衝撃を受け、綱引き状態でバランスが取れなかった John がぶれなくなった（“losing vertigo”）。

その後、John は行動をおこす。本執筆のため調べ物をし、休暇の時間をかき集めては、執筆にあたる。1年後、45歳のときには小説が完成しており、出版の契約も済ませ、映画化の権利を売る。銀行は辞め、執筆が John の仕事の核となり、国際的な作曲コンクールの運営も始める。占星術師からは、執筆活動も音楽関係も言及されていた。

3.16　第3の仕事　―　コンサルティング

> I had expected to leave banking-related things altogether. … And I learned that giving advice to people who have already decided what they want is really quite enjoyable, provided it didn't get in the way of the books and the music. The bit I disliked was having to go into that bank every morning.

ここで、銀行に関連したコンサルティング業務にいそしむ John の姿が描かれる。決して計画したわけではないが、クライアントに求められ続け、なかなか楽しいものだと実感している。これは、これまでの John のキャリアが無駄では無かったことを示し、今までのキャリアについていた自分に正当性を与えるものである。John が自分でそう解釈しているか、本当にそうであるかは別として、自分自身が納得できるというのが一番であろう。それが語りの意味であろう。

銀行に行くことについても、"every morning" のように、時間の表現が入り、毎日の実際の業務という感じが出ている。しかし、"the bit I disliked" のように、嫌なのはほんの少しである。気持ちが晴れたことで、銀行もそれほど嫌ではなくなったと思われる。

3.17　ポートフォリオキャリアに落ち着き、満足している45歳

John は、様々な専門的活動からなるポートフォリオキャリアに落ち着き、満足している。

> You have to be willing to say I am actually going to invest in growing a new life, where I am supporting things I really love, where I can meet interesting people, whether they are painters, musicians and dancers, or people who have my accounts. I want to get involved, not just with my money. I want to have a part to play as well.

新しい人生への投資に喜ぶ未来志向がうかがえる。用いる語彙もポジティブになってきている。そして、お金だけではなく、自分の役割を果たしたい、という気持ちがあらわれる。“invest”というお金に用いる用語を、新しい人生への投資という人生の成長のために使っている。金銭ではないのだ、と強くアピールしている。

3.1で、Johnは、“And clearly you're well paid.”と銀行員が経済的に恵まれていることを示している。お金のことばかり話題にする銀行員たちが嫌で、15年間も食堂へ行かなかったことも話している。3.6では、“I became an unpaid consultant and have remained so.”と無償で働いていることを強調している。金銭面に執着していないことを表現している。

銀行を辞めることによる経済的不安は、Johnの心にあるが、なかなか語りとして口にださない。3.7では、家族・友人から“jeopardize”したいのかと責められる。自分で言葉に出すのは、占星術師との会話で“You're trying to protect yourself from failure”と指摘された後公園を歩きながらである。3.12で、“really risky とか、“dire economic consequences”と語る。3.14でも、“the risk for social failure and economic failure”と語る。これらは、死から振り返ったときの自問の中である。占星術師の叱責により、やっと自分の本心が言葉にできたと言える。この経済的リスクこそが、Johnにとって“fell on his face very publicly”（3.12）という足かせであった。

5年間かかったのは、この経済的リスクから、失敗したときに世間の評判を心配したからである。しかし、お金について語るのは嫌いである。お金について語る人たちが嫌いである、という自分があるため、お金の心配をしているという本心を認められない自分がいた。従って、語りにあまり出てこない。しかし、これこそが、綱の一方を強く引っ張っていたものと言える。

3.2　分析まとめ

以上の分析は、大きく3つの視点を中心としておこなった。綱引き、濃霧、時間、である。時間の視点は、更に3つに下位分類した：時間の単位、視座の

逆転、時間である。

綱引きについては、John は、40歳の誕生日のころから 4 年間、占星術師が言うところの “a painful internal tug-of-war” にあった。それは “glossy” という一語に凝縮される。この “war” あるいは “mortal combat” と表現された葛藤は、濃霧（fog）の比喩につながっている。先が見えない濃霧による視界の悪さは、見た目や収入はいいが中身が伴わない銀行員であるという暗闇から抜け出したいこと表している。また、綱引き状態のどちらに力を入れるべきか、という混沌とした気持ちも表している。John を通して語られた友人の言葉にも、綱引きが見えた。

時間の視点から言えば、John にとって嫌いなことはゆっくり進み、好きなことは速く進んでいる。それは、時間の単位の使い方に出ている。また、このままではいけない、変わらなければと感じているときは、あせる気持ちが時間の表現の中に現れていた。

44歳の頃、占星術師に会うのは、それまでの友人・家族がわかってくれなかったからだ。期待はしていないというが、本心は、藁にもすがる気持ちと自分の持っている答えを言い当ててほしいという期待があった。占星術師との出会いから、時間の進み方が変わる。ここでの時間の単位の使い方は、それまでの “years” とは異なり、“seconds”、“moments”、“minutes”、更には、時間が凍結するほど、John には重みがあった。

占星術の後、公園を歩きながらの自問には、視座の逆転が起こっている。自分の死を設定し、そこから振り返って自分に向き合った。その後、濃霧という言葉で表される迷いが晴れた。“clarity” を得て、その後濃霧や綱引きの比喩が現れなくなる。

占星術師に会ったとき、既に心は決まっていた。しかし、しっかり言葉に出して問いを問うたりはしていなかった。占星術師との会話が、カウンセリングのような効果を生み出し、自分の答えが心の内から引き出された。自分の気持ちを語り、聞いてもらうことにより、自分に二つの問いを投げかけ、自分の気持ちを確認できた。方向性が定まり、銀行員を続けながら、行動に出た。小説

の出版が決まって自信がついたところで、銀行を辞めた。占いから丁度1年後の45歳である。コンサルティングも行い、これまでの経歴も活かしながら、今後の自分の成長への投資という展望ある明るい未来へ向けて日々楽しんでいる様子がうかがえる。

Johnが葛藤の中にいた40歳から45歳の5年間は、Levinson（1978）の言う人生半ばの過渡期にあたる。以下では、中年期という部分に光をあて、Johnの語りを解釈してみたい。しかし、その前に、まずIbarra（2003）が提出したJohnの語りに対する解釈を紹介する。

4　Ibarra（2003）の解釈

Ibarra（2003）は、キャリア・チャンジの過程に焦点をあて、語りを分析している。Johnの語りについては、人生の過去と将来をつなげる物語の意味づけという解釈を与えている。占星術師との会話が、Johnにとってひらめきの瞬間となり、これまで考えていたことを行動に移せるようになった。これが契機となってJohnの物語が再構成され、Johnにとっても、周りにいる人々にとっても納得のいく物語となった。キャリア・チェンジには説得力ある物語が必要である。このような結論を導き出している。

Ibarra（2003）は、キャリア・チェンジのための型破りな戦略として、慣例に従わない9つの指針を示している。その戦略のうち、Johnの語りは、特に戦略7に大きく関わっている。戦略7は、日常におこる出来事の中に、何か意味を見いだし、自分の物語を何回も書き換える、というものだ。キャリア・チェンジのための過渡期は3年から5年かかるものだ。その中で、物事を打開するきっかけは、もしあるとするならば過渡期の後半に現れることが多い。日常におこる何かを自分できっかけとして捕らえ、自分の物語に意味づけを行い物語りを作っていく、というものである。Johnにとって、それは占星術師との会話である、という解釈である。

Ibarra（2003）の解釈に中年期という視点はない。次の節では、Johnが丁度「人生半ばの過渡期」にあることに着目してみたい。

5　中年期の視点から

John が自分に 2 年間の猶予を与えたのは、40歳の誕生日のことである。40歳は、Jung（1931）が「人生の正午」と称するように、これまでの人生前半と異なる人生後半が始まる地点である。John が執筆業を中心とした新しいキャリアで生き生きとするのは、45歳であり、葛藤の中にあったのは、40歳から45歳の 5 年間である。これは丁度、Levinson（1978）の「人生半ばの過渡期」に相当する。Levinson（1978）によれば、「過渡期の主要な課題は、それまでの生活構造を疑いを持って見直し、自己および外界を変える様々な可能性を模索し、次に続く安定期に新しい生活構造を築く基盤となる重要な選択を行う方向に進むことである。」これまで無視してきた面を発揮しようとし、以前あきらめた可能性が浮き上がってくる。「自己の内部での戦いのとき、外の世界との戦いのとき」であり、危機を伴うときである、とする。外面的には成功しているように見えても、内面的には絶望に陥っている場合もある、という。

John は、これまでの銀行員という生活に疑いを持ち、元銀行員が就くような職業を探した。しかし、それでは変わらないと感じ、執筆業を一つの可能性として考えた。自分にはその才能があると自信があった。自己の内部で綱引きがあり、また友人、家族にもわかってもらえないもどかしさを感じていた。John にとってまさに中年期の危機であった。

中年期に体験される心理的変化の特徴を岡本（1985）は否定的変化と肯定的変化に分けている。否定的変化は、体力の衰え、時間的展望のせばまりと逆転、生産性における限界感の認識、老いと死への不安である。これまで生きてきた年数ではなく、これから生きられる年数が重要になり、「死の側から自分の年齢を考える」ようになる。肯定的な変化は、自己確立感・安定感の増大と再生同一性の確立（アイデンティティ再体制化）である。

John は、中年期の否定的変化として、時間的展望のせばまりと逆転を体験している。元銀行員が就くような仕事を考えたが、それでは問題の先送りであり、"I urgently felt the need to change sooner rather than later." のように、焦りを感

じている。残り時間が少ないという時間的展望のせばまりを感じるからである。さらに、Johnは、時間的展望の逆転を語っている。「60歳になって振り返ったら…」、「死を75歳と設定して44歳を振り返ったら…」、と自分に問いかけている。前者は、“fundamental”だと言い、後者は“physical sensation”を起こさせ、Johnにとっては決意を固める重要な契機となっている。(4)

肯定的変化であるアイデンティティ再体制化は、否定的変化の体験をきっかけに青年期に選択した生き方を問い直し、新しい方向性を模索していき、再び安定した自己を確立していくことである。岡本（1985、1997）は、このプロセスを4段階に設定している：I身体感覚の変化の認識にともなう危機期、II自分の再吟味と再方向付けへの模索期、III軌道修正・軌道転換期、IVアイデンティティ再確定期。第1段階は、「もう若くはない」という気づきの段階で、自己の有限性の自覚が危機感をもたらす。Johnは時間的展望のせばまりを感じ、銀行員としての自分に耐えられなくなる。第2段階は、「自分はこれでよかったのか」という問い直しが行われ、特徴は自分自身への不安感やアンビバレントな意識である。Johnは、変化しなければと思いながら、綱引きの比喩にみられるように、方向性に迷う。Johnの第3段階は、占星術師との会話の後の精力的な行動である。第4段階では、語りの最後に見られるように、アイデンティティが再体制化し、安定し自己を肯定する生き生きとしたJohnがみられる。

Johnの語りから見えてきた心の動きをたどると、Johnのキャリア・チャンジの過渡期は、まさにアイデンティティ再体制化のプロセスを踏んだ中年期の過渡期であった、と結論できる。語りに時間にまつわる表現が多用されたのは、時間的展望のせばまりと逆転という中年期の否定的変化による。綱引きの

（4）　筆者がインタビューした日本人男性A氏（44歳）にも、Johnと同様視座が逆転し、残り時間を意識する語りが見られた（室松　2008）。「人生は、いつどうなるかわからない。残りの人生をどう過ごそうか。どうせだったら自分のやりたいことをやりたい。」「サラリーマンは、60から65歳が定年。サラリーマンで定年は迎えたくない。」39歳で母親の死に直面したA氏は、自分の死を意識し、時間的展望のせばまりを感じ、定年を設定して振り返っている。A氏の場合も、このような自己への問いかけが転機のきっかけとなった。

比喩は、中年期の自己の中の戦いのあらわれであり、危機感や絶望が先の見えない濃霧という比喩によって表された。

6．終わりに

Ibarra（2003）は、John の語りから、キャリア・チャンジには説得力のある物語が必要である、と論じている。占星術師との会話が John にとって意味があったのは、芸術方面に進むように言われたからではなく、John の行動を麻痺させていた心の葛藤を指摘され、どちらかを選ばなければならないと言われたからだとする。芸術方面に進みたいことは、John には分かっていた。占星術師は John が経験していないことを明らかにしたのではなく、これまでの経験を新しい視点で見ることを John に気づかせたからだ、とする。占星術師が John の物語を構成するためのヒントを与えるきっかけになったというのだ。

岡本（1997）には、中年期のアイデンティティ再体制化のプロセスを踏まず、危機を解決できないタイプも紹介されている。John も、占星術師との出会いがなければ、きっかけを失い、模索が続いていたかもしれない。占星術師との会話は、アイデンティティ再体制化のプロセスの第2段階である自分の再吟味と再方向付けへの模索期と、第3段階である軌道修正・軌道転換期の間に位置する。占星術師との出会いが模索期から抜け出すきっかけとなり、軌道修正へと移行できた、と考えられる。

Hall（1976）は、組織によってではなく、個人によって管理され、外的ではなく内的（心理的）成功を基準とする個人の要求を満たすよう時折方向転換するキャリアをプロティアン・キャリアと呼んだ。変化の時代である現代は、プロティアン・キャリアの時代である。中年期でキャリア・チェンジを行う人は、現代のキャリアの理想とされるプロティアン・キャリアを志向しているといえよう。人生80年、90年と言われる昨今、中年期という視点からキャリアを考えることは重要である。

キャリア・アンカーの確立した中年期に訪れるトランジションを乗り越えるプロセスやスキルを解明することは、トランジションを迎えるにあたって、ま

たその最中にいる個人の意思決定・行動・心構えに関して示唆を与えると思われる。語り手の言語に表れた表現、比喩や、言語の背後にある文化や社会の影響を読み取り、心の動きを捉えることが、それらの解明につながると考える。言語と価値観、文化、行動について、沢登（1986:223）は「異なった言語を話すことは、異なった価値観に立ち、異なった文化を踏まえて、異なった言語行動をとることである」と、している。個人の価値観はキャリアにとって重要な要因である。ここでは、イギリス人の英語の語りを取り上げたが、日本人の日本語による語りと比較すると、言語表現に価値観や文化の相違が顕在的、潜在的に表れ、それらがキャリアに与える影響を比較することができるだろう。

References

Bridges, William 1980. *Transitions: Making Sense of Life's Changes*. Perseus: Cambridge, MA.（倉光修・小林哲郎訳 1994.『トランジション：人生の転機』創元社）

Bryant, Adam. 1999. "They're Rich (And You Are Not)," *Newsweek*, 5 July 1999, 34-41.

Hall, Douglas T. 1976. *Careers in Organizations*. Glensview, IL: Scott, Foresman.

Ibarra, Herminia 2003. *Working Identity: Unconventional Strategies for Reinventing Your Career*. Harvard Business School Press: Boston, MA.（金井壽宏監修・解説、宮田貴子訳 2003.『ハーバード流キャリア・チェンジ術』翔泳社）

Jaques, Elliott 1965. Death and the Mid-life Crisis. *International Journal of Psycho-analysis* 43: 502-514.

Jung, Carl G. 1931. The Stages of Life. *The Collected Works of Carl G. Jung*, Vol. 8, Princeton University Press, 1960.

Levinson, Daniel J. 1978. *The Seasons of a Man's Life*. Ballantine Books: New York.（南博訳 1992.『ライフサイクルの心理学』講談社学術文庫）

水野節夫 2000.『事例分析への挑戦：'個人' 現象への事例媒介的アプローチの試み』東信堂

室松慶子 2008. Planned Happenstance Theory の視点から考えるビジネスキャリア形成：「人生半ばの過渡期」は一歩踏み出し行動する時期.『現代社会研究』第5号 pp.31-41. 東洋大学現代社会総合研究所

岡本祐子 1985. 中年期の自我同一性に関する研究. 教育心理学研究 33: 295-306.

岡本祐子 1997.『中年からのアイデンティティ発達の心理学』ナカニシヤ出版

沢登春仁 1986. 日英語の発想と表現. 伊藤克俊他編『ことばと人間：新しい言語学への試み』pp.221-251. 三省堂

Schein, Edgar H. 1978. *Career Dynamics: Matching Individual and Organizational Needs*. Reading, MA: Addison-Wesley.（二村敏子・三善勝代訳 1991.『キャリア・ダイナミクス－キャリアとは、生涯を通しての人間の生き方・表現である』白桃書房）

—むろまつ　けいこ・法学部准教授—